

資料(一) 職人歌合番組一覧

東北院職人歌合（五番本）

一	醫師	陰陽師
二	（鍛冶）	（番匠）
三	（刀磨）	（鑄物師）
四	（巫）	（博打）
五	（海人）	（買人）
判者	經師	

\* 目録番号1の資料に従うが、職名を欠くため曼殊院本により名を補った。

東北院職人歌合（十二番本）

一	醫師	陰陽師
二	仏師	經師
三	鍛冶	番匠
四	刀磨	鑄物師
五	巫女	盲目
六	深草	壁塗
七	紺搔	筵打
八	塗師	檜物師
九	博奕打（博打）	船人
一〇	針磨	數珠引
一一	桂女	大原人
一二	商人	泉郎（海人）

\* 目録番号2の資料に従う。群書類従本と表記が異なるものは（ ）にて示した。

鶴岡放生会職人歌合

一	樂人	舞人
二	宿曜師	竿道
三	持經者	念仏者
四	遊君	白拍子
五	繪師	綾織
六	銅細工	蒔絵師
七	疊差	御簾編
八	鏡磨	筆生
九	相撲	博勞
一〇	猿樂	田楽
一一	相人	持者
一二	樵夫	漁夫
（判者）	八幡宮神主	

\* 目録番号6の資料に従う。松下家本に同じ。



七十一番職人歌合	
左	右
一 番匠	鍛冶
二 壁塗	檜皮葺
三 研	塗師
四 紺屋(紺搔)	機織
五 檜物師	車作
六 鍋壳	酒作
七 油壳	餅壳
八 筆結	筵打
九 炭焼	小原女
一〇 馬使(馬飼)	皮壳(皮買)
一一 山人	浦人
一二 樵	草刈
一三 烏帽子折	土器壳(土器造) 《一七番右》
一四 帶壳	扇壳
一五 蛤壳	白物壳
一六 弓造	魚壳
一七 挽入壳	弦壳
一八 饅頭壳	《一二番の後に移動》
一九 紙漉	法論味噌壳
二〇 鎧細工	塞磨
二一 草履造	轆轤師
二二 傘張	硫黄掃壳
二三 御廉編	足駄造
二四 一服一錢	唐紙師
二五 座頭(琵琶法師)	煎じ物壳
二六 仏師	女盲
二七 蒔絵士	経師
二八 絵所(絵師)	貝磨
二九 杓造	冠造(冠師)
三〇 立君	鞠括 《図は左右が入れ替る》
三一 銀細工	図子君
三二 針磨	薄打
三三 紅粉解	数珠屋(念球挽)
三四 薬師	鏡磨
三五 米壳	陰陽師
三六 いたか	豆壳
	ゑつた(ゑた)

三七 豆腐壳	索麵壳
三八 塩壳	麴壳
四〇 燈心壳	一文字壳
四一 牙儉	蔵回
四二 筏さし(筏士)	櫛挽
四三 枕壳	疊刺
四四 瓦焼	笠縫
四五 鞘巻切	鞍細工
四六 玉磨	硯切
四七 暮露	通事
四八 文者	弓取
四九 白拍子	曲舞々
五〇 放下	鉢叩
五一 田楽	猿楽
五二 縫物師	組師
五三 摺師	疊紙壳
五四 手箱壳(葛籠造)	皮籠造
五五 矢細工	箆細工
五六 藝目繰	行膝造
五七 金堀	水銀堀
五八 包丁(包丁師)	調菜
五九 布壳(白布壳)	直垂壳
六〇 苧壳	綿壳
六一 薰物壳	薬壳
六二 山伏	地者
六三 禰宜	巫
六四 競馬組	相撲取
六五 念仏宗	律家
六六 連歌師	法華宗
六七 比丘尼	歌歌(早歌歌)
六八 山法師	尼衆
六九 華嚴宗	奈良法師
七〇 楽人	俱舎宗
七一 酢造	伶人(舞人)
	心太壳

\*職人の名称及び配列は目録番号7・8・9の資料に従った。但し、番組については、東京国立博物館本のテキストに従い、これと名称表記の異なるものは( )にて示した。



資料(二) 絵巻粉本(一)下絵収録和歌

\*本巻に収録される絵巻下絵に、全部ないし一部が記された和歌を、各資料ごとに掲げた。  
\*表記は『新編国歌大観』(角川書店)に従い、収録歌集が複数ある場合は、一書に代表させている。『新編国歌大観』の巻数―歌集名―歌番号の順に記した。

\*歌作者の判明するものは、**二**で示した。

\*収録資料において歌詞の一部が改変されているものは◇で該当箇所を示した。

12・五行歌絵巻

木 國とめる民のかまとの煙にも外山の木木のもとぞしらるる

(第三巻―一三四 拾遺愚草員外―三八九) 【藤原定家】

火 ふかき夜の道にさきだつ松の火の光をおくる契ばかりや

(第三巻―一三四 拾遺愚草員外―三八〇) 【藤原定家】

土 わきそめしはじめもしらずあらかねの土よりなれるよもの海山

(第三巻―一三四 拾遺愚草員外―三八一) 【藤原定家】

金 露さえて月かげしろき風のうちにおのが秋なる鐘のおとかな

(第三巻―一三四 拾遺愚草員外―三八二) 【藤原定家】

水 行へなき山のしづくの露ばかりながるる水のすゑのしらなみ

(第三巻―一三四 拾遺愚草員外―三八三) 【藤原定家】

13・方角歌絵巻

東 あさ日さすきしの青柳うちなびき春くる方はまずしるきかな

(第三巻―一三四 拾遺愚草員外―三八四) 【藤原定家】

西 宮こよりたつねいくのの花薄ほのかにてらすみか月の空

(第三巻―一三四 拾遺愚草員外―三八五) 【藤原定家】

南 堂たてし岸のかひある藤波のなびきてともにおもひやるかな

(第三巻―一三四 拾遺愚草員外―三八六) 【藤原定家】

北 ひかげみぬこなたの軒の陰の雪山のこしちは空にしられぬ

(第三巻―一三四 拾遺愚草員外―三八七) 【藤原定家】

秋のよの影かたぶかぬもち月のとまるは空のもなかなりけり

(第三巻―一三四 拾遺愚草員外―三八八) 【藤原定家】

14・五色歌図

白 しもうつむかものかはらになくちどりこほりにやどる月やさむけき

(第三巻―一三〇 秋篠月清集―一四九八) 【藤原良経】

黒 くもふかきみやまのさとのゆふやみにねぐらもとむるからすなくなり

(第三巻―一三〇 秋篠月清集―一四九九) 【藤原良経】

15・名所歌絵巻

春二十首

音羽河 山城国

女房

音羽河山にや春のこえつらむせき入れておとす雪の下水

(第四巻―三三三 建保名所百首―一) 【順徳院】

16・名所歌絵巻

ふめばをしふまらずはゆかむかたもなしちりつむにはの花桜かな

(第三巻―八一 赤染衛門集―四二五) 【赤染衛門】

左大臣

行末は雲もひとつのむさし野にくさの原より出づるつき影

(第四巻―四二二 仙洞句題五十首―一五七) 【藤原良経】



崇賢門院

有明のかげをしるべにさそはれて夜ぶかく出づるすまの浦舟

(第一卷—二〇 新後拾遺和歌集—九一一) 【崇賢門院】

藤原有家朝臣

朝日かげにはへる山の桜花つれなくきえぬ雪かとぞみる

(第一卷—八 新古今和歌集—九八) 【藤原有家】

17・吉野歌絵巻

承元二年十一月最勝四天王院御障子

吉野山

みよしののたかねの桜ちりにけり嵐もしろき春の明ぼの

(第四卷—一八 後鳥羽院御集—一四一〇) 【後鳥羽院】

正月十日のほどに、はるのうたたてまつれとありければ、

まだいでたちもせぬかくれがにて

みよしのははるのけしきにかすめどもむすばほれたるゆきのした草

(第三卷—七二 紫式部集—五九) 【紫式部】

新院の百首の中の春

ゆきふかきいはのかけみちあとたゆるよし野のさとも春はきにけり

(第二卷—一一二 待賢門院堀河集—五一) 【待賢門院堀河】

いづことも春の光はわかにまだみよしののやまはゆきふる

(第三卷—一二 躬恒集—四二七) 【大河内躬恒】

春

平さだふんが家歌合によりみ侍りける

壬生忠岑

はるたつといふばかりにや三吉野の山もかすみてけさは見ゆらん

(第一卷—三 拾遺和歌集—一) 【壬生忠岑】

後鳥羽院宮内卿

みわたせはふもとばかりにさきそめてはなもおくあるみよしのの山

(第一卷—一一 続古今和歌集—八八) 【宮内卿】

前内大臣

まだきよりちるかとぞみる紅葉ばのうつりておつる山の滝つせへ布引の滝

(第一卷—二〇 新後拾遺和歌集—四五四)

京極前太上天臣、布引の滝見にまかりて侍りけるに

二条関白内大臣

みなかみの空に見ゆるは白雲の立にまがへる布引の滝

(第一卷—八 新古今和歌集—一六五二) 【藤原師通】

夏歌の中に

中臣祐殖

さらしえぬ色かとぞみる五月雨ににごりて落つる布引の滝

(第一卷—二一 新続古今和歌集—二九一) 【中臣祐殖】

五十首歌たてまつりけるに

嘉陽門院越前

よし野川たぎつ岩根のふじの花たをりてゆかむ波はかくとも

(第一卷—九 新勅撰和歌集—一三二) 【嘉陽門院越前】

だいしらず

湯原王

よしのなるなつみの河の川よどに鴨ぞなくなる山かげにして

(第一卷—八 新古今和歌集—六五四) 【湯原王】

題しらず

よみ人も

花ざかりまだもすぎぬに吉野河影にうつろふ岸の山吹

(第一卷—二 後撰和歌集—一二二)

春の歌とて

前中納言定家

いつもみし松の色かははつせ山へよしの山さくらにもる春のひとしほ

(第三卷—一三三 拾遺愚草—九二二) 【藤原定家】

このもとにたびねをすればよしの山はなのふすまをきするはるかぜ

(第三卷—一二五 山家集—一二五) 【西行】

冬

ゆき、氷

やまとのくににまかりけるときゆきのふりければ

あさばらけありあけの月とみるまでによしののやまへ里にふれるしらゆき

(第三卷—一六 是則集—二二) 【坂上是則】

みよしのの山かきくもり雪ふればふもとの里はうちしぐれつつ

(第二卷—一三 玄玉和歌集—二六四)

詠百首和歌 建仁二年八月廿五日

正五位下行左近衛権少將藤原

みよしののやまの秋風さよふけてふるさとさむくころもうつなり

(第四卷—一五 明日香井和歌集—三四四) 【藤原雅経】